

合同句集

万象

# 山始

滝沢伊代次

餅投げて鴉を呼べり山始  
向き合へる妻の一ト言冴返る  
ものの芽の太きが土を割つて出づ  
北窓を開き峠の見ゆるかな  
真四角な田圃をかこみ畦青む  
つかみたる枝より一ト声巢立鳥  
赤ん坊の裸に映る柿若葉  
田を植ゑてしづかな村となりにけり  
大瑠璃の一ト谷わたる澄みし声

土蔵より婆のさげくる蝮酒  
帚草狐の嫁入り通りけり  
巢の周り幾度も飛び帰燕かな  
麓より庭までつゞく花野かな  
針仕事ぽつりと話す夜長妻  
襖入れ鶴あそぶ間となりにけり  
大籠に落葉踏み込む男かな  
夕雀二羽の遊べる返り花  
雀にも軒に吊るせり冬至粥  
焚き口に一本煤け火吹竹  
鴛鴦のめをとの枕屏風かな

# 同人作品

麦の秋ふり返るたび日は西へ

中山純子

凱旋門に吊る三色旗巴里祭

木暮剛平

高千穂の新雪に貂走せし跡

大西八洲雄

床叩く蹄の音や大旦

大坪景章

隣とて丘ひとつ先麦の秋

松原智津子

一盞は父に一盞は初花に

岡本敬子

ぶな伐りし父に干菜湯沸かしけり

石沢蟹城子

樨萌ゆる熊の登りし爪の跡

山形悦子

日蝕や獣の匂ふ茸山

阿部月山子

蜆売り濡れたる俣に川草履

安藤章雄

海鼠突く波静もれる出雲崎

森 重夫

去年今年煤け柱の古時計

関口青稻

妻何処雪女として出でよ

佐藤三男

大白鳥天翔くる羽根日を弾く

井島郷雲

はだれ野に鉢の箱積む会津口

佐藤雄二

狼煙山一本松の緑立つ

森山暁湖

雛の燭ともす役目をもらひけり

大信田梢月

秘仏見に奈良麦秋のひとり旅

小林修水

春の海猫己が水輪の中で鳴く

金居欽一

地を鳴らす男踊りや風の盆

亀田やす子

兄の手を離さずに子の初電車

増田幸子

掛声を合はせ発止と初鼓

鈴木朗月

初夢に二尺余の皿挽きにけり

生井慶子

種選み舐めて確かむ塩加減

小林馨

杖の頭に顎のせ見たり初桜

藤江昭

骨壺を据ゑたる先に青筑波

藤江朋子

飛花落花大僧正の緋の衣

原田しづえ

黄落や野外演奏たけなはに

渡辺方子

松の毬残し大鷹巢立ちけり

齊藤敬子

行く春の松笠拾ふ法隆寺

三好かほる

ひよんの笛幾度も吹く小春かな

水野加代

雨晴れて白き満月西行忌

飛高隆夫

月おぼろわれらが地球動きをる

檜山哲彦

白鳥に餌箱の底を見せて去る

内海良太

桃畑の小屋に挿しあり桃の花

内海保子

議事堂を一喝したりはたた神

大内佐奈枝

青麦の風の畝間を若き雉子

長沢ふさ

青あらし一步踏み出す芭蕉像

山口耕堂

結納の軒に声あぐ燕の子

河村むつ子

なで牛へ一輪ほぐる寒紅梅

峯 高子

かもしかの罫を見たり薬狩

大坪貞子

手古奈みち萩みだるもこぼるるも

山下良江

手賀沼の日ざし斜めに冬桜

山本とく江

潜水服汐吹き乾く雁渡し

綱川恵子

滴りに水のふくらむまあひあり

松原三枝子

走り根も瘤も芽吹けり大菩提樹

内田郁代

熊の皮掛くる駅舎の夏炉かな

名和政代

海近き新居に溢れゼラニウム

江見悦子

峯雲にふと衰へし力見ゆ

新井徳子

風立ちぬ花野に楽の湧くごとく

岩崎眉乃

花衣まとひぬオペラ聴く夜は

三枝正子

潮引きて鷹の降り立つ谷津干潟

内藤恵子

日も月も筑波より出て稲の花

谷田部栄

蓬萊に尾山神社のひよんの実を

佐藤忍

地芝居の鬼振り廻す六尺棒

中橋文子

葦の角産卵の鯉泥とばす

木内徵子

手に据ゑし鷹の眼の淑気かな

須賀允子

花祭りらげんげ野を駆けて来し

室谷幸子

歌舞伎座の裏の潜り戸鳥総松

小野千枝子

日溜りの羅漢に飛べり杉花粉

降旗加代子

獅子頭抱へ踏切り待ちにけり

中和田洋美

白寿翁声を豊かに初謡

山本絢子

松飾り金色の月仰ぎては

堀 文子

その昔閉じ込められし葺開く

安部すず枝

初護摩の天女の舞へる格天井

疋田華子

狼札貼る軒柱注連飾

石井大泉

田遊の牛寝ころんでしまひけり

山田春生

餅花の乾ける音に目覚めけり

中島寿美

鉦割の餅分けあへり山始

鎌須賀礼子

舞初の翁舞台を踏み鳴らし

小林洋子

房総の海をするりと初日の出

吉原田鶴子

城垣の大石小石すみれ草

吉中愛子

木の門より栗鼠の尾を振る三日かな

馬場秀

数へ日の一と日天女の舞を見に

小林愛子

マンションの隅の日だまり冬の菊

中山秋岳

丁寧なお辞儀を返す社会鍋

広瀬千鶴

大花野つらぬく坂東太郎かな

吉川信子

姉泣いて妹泣き出す草の花

榎本文代

嫁入りの守り刀を鍛冶始

鈴木千恵子

年旧りし建礼門に落花舞ふ

村上みきお

買初は鶴の飛翔の江戸切子

山内なつみ

冬の燈や熊胆包む竹の皮

浅井敦子

極月の朝日さし込む簪屋

西本才子

岩田帯授かる八十八夜かな

川越昭子

寒晴や富士の大きく近づきぬ

久松和子

梨の花唱歌洩れくる分教場

小川あやめ

百観音一体ごとの初日影

山田節子

庖丁式終へ配らるる春大根

和氣永子

竹垣をきれいに洗ひ門火かな

武井美代子

初風や栗鼠のぞきこむ厨窓

横井博行

一世紀生き抜き仰ぐ初御空

三澤たき

鴨のせて薄氷ゆらぎ始めたる

三澤治子

初螢北斗の柄杓よりこぼれ

井上玉枝

水槽の真ん中冬の金魚かな

山崎祐子

朝富士に雪の鮮し根深汁

神田美穂子

海の紺割つて漕ぎ出す初荷舟

淺場芳子

丹頂の大股に来る枯の中

淺場英彦

鶯や葬の米研ぐ共同井

大村峰子

はぐれ猿しぐるる谷に走りけり

曾根満

七日粥一握り足す倉の稗

藤原千代子

焼畑に娘盛りを鹿火屋守

海野 勲

鮎釣の竿畳むとき水匂ふ

東福寺碧水

初あらし草の匂ひの犬抱いて

松波幹治

銅像の編笠姿新松子

若島久清

端座して南郷庵に春惜しむ

岸川素粒子

ゴージャンの笛吹く女春愁

田村愛子

洗ひ干す座職の筆や桐の花

大宮広子

年惜む日当る山と翳る山

小林登喜枝

麩屋の暖簾ふの字をどれり桃の花

新保ふじ子

越して来し一家に少女木の芽垣

三谷道子

早星緋の装束の王の舞

高村俊子

ちちははの墓山越えて帰燕かな

宇野漣子

虎が雨石塊のせて海女の墓

塩 由造

干支の猿三代揃ひ年来る

須原正子

せきれいの畝を走れり鋤始

野上智恵子

ヴェネツィアの迷路めく路地恋の猫

井村和子

石垣はどれも利き石冬の草

宮口文泰

初雪の草に残れり欣一忌

小谷延子

仰ぎたる頬にかかりし涅槃雪

中條睦子

新しき墓に玩具と花切籠

林和子

父母の夢の二夕夜や御霜月

志奈禮子

鶏も犬も野放し花梯吾

南 恵子

冬夕焼起伏はてなき葡萄畑

角田和子

萩の風妣の箆笥に加賀手毬

直江由季子

寒菊や木地師の里の路地づたひ

松本勢津子

歡喜天おはす御堂に梅雨の蠅

澁江阿喜子

多作より遺る一句を西鶴忌

木谷久邇彦

月の客戦に生きし人集ふ

漆谷豊信

美しきもの水無月の葉つばかな

谷渡末枝

恙無し一輪挿しに枇杷の花

中川志帆

魔除け蓑吊る湯の宿や墓の恋

石田野武男

朝鮮鐘浦曲にひびく淑気かな

山本麓潮

投網の輪ひろがってゆく鮎の川

福島せいぎ

潮入りの堰鳴る白魚上るころ

森 郁代

プロ野球ストに入りたる子規忌かな

二宮一知

蜂の箱運ぶ蜜柑の花の下

川口崇子

梅東風や道真歌碑の彫り深し

井山幸子

蜘蛛の巣や廃家を沈め福木垣

伊舎堂根自子

王陵の穂草ばかりに吹く風よ

前田貴美子

滑走路甘蔗畑に延び芒種南風

呉屋菜々

赤土の畝に吹かるゝ豆の花

中村 阪子

初夢に天竺楽団来て奏す

渡真利真澄



創刊五周年記念

# 合同句集 万象

平成十八年五月一日発行

頒価 二、〇〇〇円

編集 『合同句集 万象』

編集委員会

発行人 大坪景章

発行所 万象発行所

〒237-0001

千葉県船橋市市場四―一―一―一六〇七  
電話 〇四七(四二三) 四九四〇

印刷所 長苗印刷株式会社